鈴木　貞夫　著：

『福島の歴史地理研究』

いわき地域学会出版部　1992年２月

Ｂ５判　224ページ　6,500円

歴史地理の研究書の出版はさかんであるが，県単位でまとめられたものは少ない。多年福島県にあって研究に励まれてきた著者が，その成果をまとめて刊行されたことは喜ばしい。県内在住の方々にとって研究の参考に，また教材資料として広く利用されようし，他地方在住者が福島県を訪れる際には見学の好伴侶となるであろう。評者も本書を携え，久しぶりに福島県に旅行をしたくなった。

地理学徒ならば誰もが経験されていることだろうが，文献を読み興味を覚えて現地を訪れても，どこに何があるかを明示されていないため，その文献の筆者に案内していただかないと要を得た見学ができないことが少なくない。本書の一番の特色は，143枚にも及ぶ自作の地図である。その大部分は地形図またはより大縮尺の図に調査結果を記入したもので，誰でもこれらの図を頼りに，現地と照合しつつ著者の所説を学ぶことができる。

本書に中世・近世の城館を対象とする一章がある。評者にとっても興味をもっている分野であるが，今までに読んだ城館関係の書物の中には，城館自体の解説は詳細ではあっても地図による指示が不十分なために，位置がわからなくて困ったことがしばしばあった。本書に学ぶ限り，そのような心配は皆無といえよう。目次に続けて挿図目次を掲げたのも，著者の姿勢を示すものといえよう。反面，写真が一枚もないのは残念である。地図に重点をおいたので意識的に写真やグラフを使用しなかったとあるが，地図か写真かと二者択一に考えるべきものではなく，写真をも活用して，より内容を充実していただきたかった。

本書は農業・条里・城館・常磐炭田の４章より構成される。著者の恩師である安田初雄氏（福島大学名誉教授）が本書を「条里遺構に関する研究を主軸とした論考」とされているように，本書中で著者がもっとも力を注がれ，学界に寄与される事の大きいのは条里の章であろう。昭和30年代初頭には宮城・山形・秋田諸県の条里遺構は知られていても，福島県は条里分布の空白地になっていたという（安田氏序文）。浜通り・中通り，会津の広い範囲にわたる多数の条里遺構を検出されたのは，著者の大きな功績と言えよう。本書に収められた143枚の図のうち，83枚（58％）が条里関係のもので，中には面積１km^2にも満たない零細なものまである。よくぞ見落とされずに検出されたものと敬服にたえない。

条里について門外漢の評者はよくは知らないが，当時の地表面は埋没していることが多く，現在表面に見られる条里型地割との関係をどう理解するかが問題と聞いている。この点についての著者の見解をどこかに示して欲しかった。

農業の章では，著者の出身地福島盆地，青年期に在職された阿武隈山地の山村川内村，今に至るまで永く在住在職されるいわき市が対象地にされる。詳細な土地利用図を作製し，微細な土地条件の差違を活用してどのような土地利用がなされ，時代とともにどのように推移してきたかの検討が興味をひく。評者は，桜桃・桃・梨・りんご等の果樹と水稲・野菜等多様な作物が交錯する福島盆地の章を，特に興味をもって読むことができた。

城館の章では，城館そのものだけでなく，所在の都市，農村に及ぼした影響をも考察している事が重要で，「消防のポンプ置場，小学校，役場，寺院，神社，商店が村の中で塊って集落構成していると，そこに似合う城館が位置している」との興味深い指摘がある。本書で取り上げられた対象地域はいわき市中北部に限られているが，今後他の地域にも研究の手を伸ばしていただきたいと思う。

常磐炭田の章では，明治期の景観復原が中心とされる。教材や巡検の資料として役立つものが少ないとの理由から始められたとのことだが，閉山後急激に遺構が失われ，景観が変貌して行く折柄，現地在住の研究者により貴重な資料が残されたことに感謝したい。

各章の冒頭に概説の項を設け，その中で，また巻頭の「凡例と語句」の中で専門外の読者のために基礎的な解説をされているのは，行きとどいた配慮といえよう。

本書は歴史地誌を意図された著作ではないが，そうであっても福島県の歴史地理を概観する一章を設け，その中で各章で取り上げるテーマの位置づけを示して欲しかったと考える。

ともあれ，県内県外を問わず，広く各方面の方々が本書を愛読されることを願ってペンを置く。

（中島　義一）